

モード Mode Mode は語る

王冠や衣装に歴史と物語

中野 香織

英ウェストミンスター寺院で6日、国王チャールズ3世の戴冠式が行われる。バッキンガム宮殿は、戴冠式に登場するローブや、王冠、宝珠、王笏（おうしゃく）など「レガリア」と呼ばれる王権を象徴する物品に関する情報を続々と公表しており、各メディアが連日報じることで、いや応なく関心が高められていく。

それらは物語や歴史的意味を背負う。国王が戴（いただ）く聖エドワード王冠は、王政が廃止された時に溶かされた中世の王冠の代わりとして、王政復古を果たしたチャールズ



戴冠式で中心的な役割を果たす
聖エドワード王冠＝ロイター

2世のために1661年に作られた。その原型は、11世紀のエドワード懺悔（ざんげ）王の時代まで遡る。

きょう英国王の戴冠式

赤いローブ・オブ・ステートを着て入場後、聖油を注がれる儀式の前に、国王は「神の前の純粹さ」を象徴するコロビウム・シンドニスと呼ばれる白いチュニックに着替え、その上に金刺繍（ししゅう）が施されたスーパーチュニカをまとう。

さらにインペリアル・マントルを着用後、カンタベリー大主教から戴冠されるのだが、儀式を終えて寺院を出るときには紫のローブ・オブ・エステートに着替え、王冠も大英帝国王冠に代わっている。

赤から白と金、そして紫へと変わ

る衣装、および聖油入れや拍車、腕輪にいたるまでのレガリアのすべてが、宗教的な意味や歴代の王たちの物語を伝える象徴になっている。

伝統を踏襲するだけでなく、キリスト教以外の宗教代表が初めて式の進行に加わるなど、多様性社会に配慮して変える部分もあるという。丁寧な情報発信を通し、新国王や王室が未来に何を残そうとしているのかが浮かび上がる。

戴冠式の模様はテレビやインターネットで生中継される。ファミリーの人間くさいスキャンダルも含め、この透明性と柔軟さこそが重厚な伝統の継承に貢献し、英国のブランド価値を高める絶大なPR効果を生んでいる。